

雪まつりとカーニバル

「冬が大好き」という人も中にはいるだろうが、およそ北国に住んでいる者にとって、冬はやっぱり厄介者。しょうがなく我慢して寒さや雪と同居しているのだ。その忍耐が切れそうな時期にほっと気休めになってくれるのが「雪まつり」。

観光客の人たちは、珍しい面白いと喜んでくれているけれど、我々にとっては「ああこれが終わって、やっと春が来るんだな」と待ち遠しい季節の前ぶれみたいな行事が雪まつりだ。

でも、雪まつりが終わったからといって、すぐに春がやって来るものではない。それからひと月半、いやふた月は雪の中だ。

札幌雪まつりが始まったのは戦後のこと。じゃあそれ以前は冬の厳しさのうっぷんを晴らす行事は無かったのだろうか、と昔に思いをめぐらしてみると、「あった」氷上カーニバルがあった。

カーニバルとは本来キリスト教国での行事で、謝肉祭という。どうやら肉を食べてはいけないという宗教的時期があって、その時期に入る前の数日間、たらふく肉を食ベドンチャン騒ぎをする。これがカーニバルの発端らしい。世界的にはリオのカーニバルが特に有名だし、日本でもこれをマネて、浅草やら神戸やらで、ラテン音楽で踊りまくる観光行事も開かれている。いずれも夏の行事だ。

札幌のカーニバルは戦前から真冬にあった。かつての紀元節、今の建国記念日とそのクライマックスだった。これはちょうど、雪まつりの期間と一致する。

紀元節といえば、日本初代の神武天皇が即位されたという伝説の話に基づにした、いわば神事である。これとキリスト教のカーニバルが何で結びつくのか、意味不明だが、ともあれ、冬のつらさをパァッと吹き飛ばそうぜという、札幌市民の気持は、昔も今も変わらない、という事なのだろう。

中島公園の池を大きなスケートリンクにして、様々に仮装したスケーターが明るく照らし出された夜の氷上を滑りまくり、観衆は寒さをこらえ、足踏みして冷たさに耐えながら立っていた。アセチレン灯の強い匂いの下に屋台が並び、ほとんど街路灯もなかった札幌でこの夜ここだけに光が満ちていた。黒沢明の映画にも、船山馨の小説にもこのカーニバルは登場している。